

# うちこ ちびっこ相撲道

◆特集◆

「両手を同時に引いて、引きましますよ——はっけよい」  
8月に開かれた内子町子ども相撲大会で、勢いよくぶつかる子どもたち。健やかな心身を育むことを目的に開かれる大会は、毎年多くの選手と保護者が集まり、会場は活気にあふれています。  
今回の特集では、内子の子どもの相撲について紹介します。古くから町民の娯楽として親しまれてきた相撲文化。競技に打ち込む子どもたちや周りで支える人々の声から、相撲ならではの魅力に迫ります。





内子町相撲協会  
会長 森岡 正樹さん

## 祖父の思いも受け継いで 地域を上げて楽しめる場に

子どもの頃、「三度の飯より相撲が好き」な祖父が指導する子ども相撲の練習に、よくついて行きました。時間になると仕事の途中でも構わず、裸にまわし姿で軽トラックに乗り、指導が終わったら知清河原で水浴びをして帰る——そんな豪快な人でした。体格のいい子を見ると「どれ、ちょっと当たって来てみい」というのが口癖。本当に相撲が好きでたまらなかったんですね。

相撲協会の役員としても長かった祖父。その孫の私が会長を務めることになった時、地域の皆さんは「お前がやるなら応援しちゃう」と支えてくれました。協会が関わる町大会も県大会も、皆さんの協力あってこそ。本当にありがたいです。大会は大人にとっても、相撲に触れるいい機会。昔のように身近な娯楽として、地域の皆さんに楽しみにしてもらえる行事として残していきたいです。子どもたちの頑張っている姿には元気をもらえます。「自分たちもまだまだ、やらないけんな」と思ってくれたらうれしいですね。



1\_真剣な表情で立ち会い。緊張の瞬間  
2\_仲間と力を合わせて戦う3人制の団体戦  
3\_勝利のハイタッチを交わす  
4\_勝負を制して、観客席は大盛り上がり  
5\_土俵で力いっぱい粘る選手。「頑張れ」「押せ」「負けるな」と、大きな声が飛んだ  
6\_子どもたちの健闘をたたえて拍手を送る



## 愛媛県ちびっ子相撲内子大会 9月14日

内子町相撲協会主催の「第32回愛媛県ちびっ子相撲内子大会」に、県内の相撲クラブ6団体が参加しました。宮相撲を起源とする県大会で、コロナ禍を経て6年ぶりの開催となりました。谷岡菖樹さん（内子相撲クラブ）の力強い選手宣誓で幕を開けた大会は、団体戦準決勝で内子チームが前年度優勝の宇和島相撲愛好会に4対1で勝利。その勢いのまま20年ぶりの優勝に輝きました。



7\_県内のクラブチーム同士で対戦  
8\_出番を待つ選手に声をかけ、背中を押す保護者  
9、10\_頑張る仲間たちをみんなで見守った  
11\_最後に行われた末三役相撲。大関戦に主審が「待った」をかける。「この勝負、来年ご覧に入れます」と、大会の継続を願った  
12\_優勝した内子チームの皆さん



## 内子町子ども相撲大会 8月8日

「第19回内子町子ども相撲大会」（内子町教育委員会・内子町PTA連合会・内子町相撲協会共催）が共生館で開かれました。個人戦と3人制の団体戦に、町内の小学校6校から約60人が出場。大人顔負けに力いっぱいつかる子どもたちに、応援席の児童や保護者の熱気あふれる声援が送られていました。



# 子ども相撲がアツい

大人も熱狂、一対一の真剣勝負

内子の相撲シーズンは「夏」。町内で開かれた相撲大会には多くの子どもたちが出場し、迫力ある取組を見せてくれました。真剣勝負の一番、一番……。勝っても負けても、頑張る子どもたちの姿は、いつも元気を与えてくれます。



# もっと強くなりたい

——内子相撲クラブで活動しませんか——



1\_「次は僕、僕！」 2\_佐々木さんが鋭い視線を送る 3\_基礎練習もしっかりと 4\_子どものまわしを締める泉さん 5\_思いっきりぶつかれ

「正面に、礼」「お願いします」——夕方の六日市自治会館に、子どもたちの元気いっぱい声が響きます。内子相撲クラブでは週に2回、未就学児から小学生まで約20人が相撲の練習に励んでいます。指導する監督の佐々木剣心さんは、自身も同クラブの出身。子どもたちの動きに目を光らせて「びびるな」「強く当たれ」と檄を飛ばします。子どもたちは保護者も見守る中、真剣な表情で稽古に打ち込みます。

クラブに所属する脇坂茜音さんと宮岡楓さんは、10月12日に京都府で開かれた「第28回全日本小学生女子相撲大会」に出場しました。同クラブからの全国大会進出は3年ぶりとなります。代表の泉清一さんは「内子は県内でも女子相撲を始めるのが早かった。男子に負けず頑張っています。これからお互いに切磋琢磨して、頑張っている」と期待を寄せていました。

宮岡 楓さん(石畳小4年)

町の相撲大会で負けたのが悔しくて、去年の9月からクラブに入りました。全国大会では優勝候補と対戦して、レベルの違いを実感。大会後は「どうやったら勝てるんだろう」と考えながら練習しています。クラブには年少の妹など、小さい子もいっぱい。同学年の女の子ももっと増えたらうれしいです。

達見 政輝さん(内子小5年)

クラブのキャプテンをしています。剣心先生はちょっと怖いけれど(笑)、いろいろな技術を教えてください。僕は先生と同じ「突き相撲」。宇和島クラブの同級生ライバルに負けなよう、強くなりたいです。練習だけでなく、クリスマス会などの楽しいイベントもあるのでぜひ、のぞいてみてください。

脇坂 茜音さん(天神小4年)

初めての全国大会で結果はベスト8でした。正直「もっと行けた」という気持ちで、悔しさのほうが大きいです。自分より大きい相手と対戦することが多いので、相手が攻めにくいように自分は小さく、強く当たれるようになるのが課題です。たくさん練習して、来年はもっと上を目指します。

小学生を中心に活動する「内子相撲クラブ」。町大会などで相撲の魅力を知った子どもたちが「もっと強くなりたい」と日々、稽古に励んでいます。同クラブの皆さんに、相撲を通して学んだことや、競技の魅力などを聞きました。



6年生の時の大野さん(左)



クラブでは、まずは純粋に相撲を楽しんでほしいです。「自分にもできる」と分かると自信になります。そして少しずつ勝つ喜びや達成感を味わえたら、それが次も頑張れる原動力になるはずです。

## 何事も、まず挑戦——「自分にもできる」が自信になる

二つ年上の姉の影響で相撲を始めました。負けず嫌いだから「姉にできて、私ができないのは嫌」と思ったみたい。4・5年生の時に出場にした全国大会では、結果を残せず——。だから6年生では「絶対に上位に行きたい」と思っていました。体力を生かして相手の攻めを我慢して、隙をついて攻めるのが私の相撲。準優勝できて自信になったし、鍛えられた足腰と負けず嫌いは、中学からの部活動でも生かされたと思います。

## Interview



第20回(平成29年)全日本小学生女子相撲大会 準優勝  
大野 春陽さん(20)



同じ土俵でぶつかり合ってこそ、  
伝わることもあるはず――

### 相撲との出会い

小学1年生で体重は50<sup>キロ</sup>。相撲は使いどころが分らない自分の力をぶつけられる場所でした。4年生になって対戦した先輩を突き飛ばした時に「この力は土俵の外で人に向けちゃだめだ」と感じました。中学からは親元を離れて愛南町に下宿し、南宇和高校相撲部の先輩と共同生活をしながら稽古に励みました。高校3年時に出場したえひめ国体が、選手としての最終目標。団体チームには同級生で現・十両の風賢<sup>かせけん</sup>がいました。彼のおかげで余計な重圧もなく、そして天狗にもならずに済みました。本当にすごい経験ができたと思います。

### 「怖い先生」になろう

内子相撲クラブで本格的に指導を始めたのは20歳の頃から。子どもに教えるのは本当に難しい――。まわしをつかんだ時の感触、攻め時を捉える勝負勘など、相撲は感覚的

な部分が多く、伝えるのは簡単ではありません。そもそも、子どもは思い通りにはいかず、怒り過ぎても褒め過ぎてもだめ。指導者としてどうするべきか、とても悩みました。ふと昔、怖い先生にめっちゃくちゃ怒られたことを思い出しました。感情をぶつけてくる先生に「この人の言うことは聞かなきゃやばい」と思ったものです。その時、子どもはうまく導こうとするだけじゃだめだと思っ

たんです。同じ土俵で互いに本気でぶつかってこそ、伝わるものがあるのでは、と――。最近の子どもたちは感情的に怒られることが少ないかもしれません。怒られるのも、善悪を知るためのいい経験です。だから自分は「怖い先生」でいようと考えています。子どもたちには、なぜ怒られたのか、何が足りなかったのかを考えられるようになってほしい。保護者の皆さんには「僕が怒るので、帰ったら慰めてあげてほしい」と思っています。

内子相撲クラブ  
監督 佐々木剣心<sup>けんしん</sup>さん

### 相撲に情熱を注ぐ先輩のように

クラブで長年、指導してくれた泉さん。小学生の頃は「元氣な親戚のおっちゃん」のように思っていました。今は師匠といえる存在です。中学の下宿先も度々のぞいてくれ、クラブの運営も大会の審判もして、どれだけ相撲に尽くす人なのか。大先輩は「子どもが相撲を経験してくれば、それでいい」と言っていました。――すごく重い言葉でした。でかすぎる存在ですが、いつか自分もそんな人間になりたいです。

# ぶつかれない時代

指導者が語る子ども相撲の未来

# だからこそ

### 内子相撲の歴史

内子町の宮相撲は350年の歴史があるといわれています。元は各神社で行われた奉納相撲が、知清河原で大々的に開かれるようになりました。昭和の娯楽が少なかった時代、相撲は夏の一大行事。旧内子町・五十崎町では、県内外から大人の力士を呼んだ対抗戦があり、応援にもそれは熱が入ったといえます。戦後は徐々に力士が減り、次第に子ども相撲へと変わっていきました。

内子町相撲協会はこの相撲大会を運営する団体です。平成元年にはついに常設の知清相撲場が完成。その土俵開きとして行われたのが第1回「ちびっ子相撲内子大会」です。愛媛県相撲連盟と組んで県大会となり、現在に至ります。私が相撲協会に入った平成10年頃、内子の出場選手は寄せ集めで、練習期間は1カ月ほど。これでは勝てない――そこで数年後、相撲協会の協力を得て「内子相撲クラブ」を立ち上げました。

### 相撲は誰もが楽しめる

相撲はルールがとても簡単です。足の裏以外の体の一部が地面に着くか、土俵の外に出たら負け。この分かりやすさが海外でも人気な理由でしょう。体が大きければ勝つとは限らず「柔よく剛を制す」「小よく大を制す」も、子ども相撲の魅力です。力が強い子、運動神経がいい子、負けん気が強い子――いろんな子がいます。まずは楽しい子――個性を伸ばしてほしいです。

始めるなら、ぜひ小さいうちから経験させてあげてください。体格差が小さい低学年のほうが、ぶつかり合いも、まわしを締めるのも抵抗が少ないです。町大会も団体戦が5人制から3人制になり、参加しやすくなりました。せつかくいい環境があるので、たくさんの人に触れてほしいですね。

### 痛みを知り、感謝を胸に

私が子どもの頃、遊びといえば砂場で相

内子相撲クラブで子どもたちを指導する  
佐々木剣心<sup>けんしん</sup>さんと泉清<sup>せい</sup>一<sup>いち</sup>さん。自身が相撲を通じて学んだこと、そして子どもたちに伝えたいことは何でしょうか――

撲を取るのが普通でした。かすり傷もよくありましたが、自然と痛みも覚えました。テレビゲームは上手いかなければリセットでき、命が回復しますが、現実とは違います。今は「人に優しくしよう」と、ぶつかり合いが避けられる時代。でも自分が痛みを経験するからこそ、他人の痛みも想像できるのではないのでしょうか。

相撲は相手がいないとできない競技。相手を敬う気持ちが大切です。相撲が取れることへの感謝、そして親や先生、応援してくれる人への感謝を忘れずに、楽しんでくれたらうれしいです。

ぶつかれない時代  
だからこそ、触れてほしい

内子相撲クラブ  
代表 泉清<sup>せい</sup>一<sup>いち</sup>さん